

韋 いへん 編

愛知大学図書館報

No.37

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

わたしと本と図書館

図書館長 荒川 清 秀

世には、ためこむのが好きな人と、捨てるのが好きな人がいる。ためこむのが好きな人は本でも洋服でも、ゴミでもためこむ。だから、部屋はいつもいっぱい。誰にどう言われても気にならない。それがこのタイプの人の特徴である。

■ 本を買うのが好き

わたしの妻はあまり本を買わない。それでいて、市の図書館へ行って、面白そうな本をたくさんみつけて借りてくる。これは小さいときからの習性だそうで、妻にとって図書館は読みたい本の宝庫だそうだ。しかし、わたしは新刊書を図書館で借りて読むことはほとんどない。読みたい本はたいがい買う。読みたい本があっても、出たばかりの本はまず図書館にない。たとえ、入っていたとしても誰かに先に借りられたりすると読めない。本が手に入るころには読む気が失せてしまう。だから、ほしい本はたいがい買ってしまふ。わたしは27歳のときに愛大に就職した。就職して一番うれしかったことは、本が好きなだけ買えるようになったことである。

■ 研究室の書架

今わたしの研究室には8段の書架が25本と、床にはおそらく数本分に相当する本が積まれている。まるで古本屋さんようだ。(二

人の同僚の研究室にも書架を5本ほど借りて置かせてもらっている。)窓際の机の前まで行くのに、かつてはまっすぐ歩けたのに、いつのまにかカニ歩きでないと通れなくなった。

床に積んである本は、ちょっと体が触れたり、部屋が揺れたりすると崩れる。朝研究室にやってきてドアを開けたら通路がふさがっているということもときおりある。地震が起きたら、本が落ちてきて、きっと外へは出られまい。評議員をしているとき、会議の席で、縄梯子がほしいと訴えたが、まったく相手にされなかった。(これで死んだら本亡く望>だ)

■ 本もずいぶん処分した

ためこむばかりで処分しようとしなかったわけではない。旧研究館から5号館の研究室に引っ越してきたときに、それまで書架の裏側に置いてあった本はほとんど処分した。知り合いの古書店に売ったものもあるが、大部分は学生(主に院生)にあげた。処分コーナーをつくって、紙に「何冊でもご自由におもちください」と書いておいたら、あっというまになくなった。段ボール箱で持っていった学生もいた。今も同僚の部屋の前にそういうコーナーを設けているが、ここでは持っていく人が限られる。図書館にも常設コーナーがあるので、そこをもっと利用するといいいのかも知



れない。教員は本の処分もできるし、学生もただでもっていけるので本の再利用になる。5号館の研究室に引っ越ししてからも、東京の古書店が地方巡回をしてきた折に、まとめて大量にやや専門外の本を売ったこともある。売るときに、買ったときの金額を考えているのは売れない。自分にとってどんなに大切だった本でも、他人には二束三文かもしれないからだ。空間をつくるために売ると思えばいい。あきらめが肝心だ。その後も、段ボールに何箱か集まると知り合いの古本屋さん運びこんだりしているが、本はなかなか減らない。

退職まで10年をきった。昔は、教員がやめたら図書館で引き取ってくれることもあったが、今はそんなことは不可能だ。めぼしい本だけとられるのも面白くない。だから、貴重書については、懇意にしている古書店にオークションでも開いてもらって売りたいと思っている。あとの本は、体の自由がきく間にどれだけ処分できるかである。

■ 言ってはいけないことが二つある

講義のときに学生によく言うことがある。わたしの部屋に入ってきて、言ってはいけないことが二つあると。一つは「先生、この本全部読んだんですか」である。そう聞かれたら「愚問じゃ」と答える。研究室にある本を全部読んだ人などいないだろう。たとえ読んだとしても、その内容をすべて覚えているはずはない。わたしはホームページにブックログというコーナーを設け、読んだ本の感想を少しずつ書いたりしているが、それはそうでもしないと、その本の記憶がだんだん薄れていってしまうからである。すぐ読まない本を置いてあるのは、いつか使うためであり、いつか読もうと思っているからである。だから、その本が何について書いた本かは知っている。(そうでなければ買うはずがない) ある問題について知りたいとき、この本を見ればいいという予測のもとに買っておくのである。

もう一つの禁句は「先生この本面白そうだから貸してください」である。これに対する答えは－「だめ」。ケチと思わないでほしい。貸さないのは、利用したいときにその本がな

いと困るからである。それに、それまでほとんど忘れていた本なのに、貸した後、妙に読みたくなることがある。不思議なものだ。

原則貸さないのだが例外はある。学生が卒論とかを書く際、図書館にない本、誰かが借りて利用できないときは貸したりする。しかし、ふだん学生に言うのは「この本面白いよ。図書館で探してみて」である。冷たいようだが、学生に安易に本を貸し与えるのは決して学生のためにならない。学生が自ら探す力を削いでしまう。昔、ある一年生の学生に貸したら、卒業前に返しにきたことがあった。安易に貸すとそんなことがおこる。そんなこともあるので自分の部屋の本は原則貸さない。

■ 個人研究図書費は個人のために使わない

個人研究図書費(個人研究費ではない)の執行については各教員に委ねられているが、わたしは、個人研究図書費はほぼ全額、大学の中国書の充実のために使う。自分用に買うことはほとんどない。図書館から本を借りていて、学生から請求があればすぐ返す。永く使いたければ自分で買う。あまり偉そうなことは言えないが、自分の個人研究費で買った本以外の本を死蔵するのはよくない。永く利用したいなら自分で買えばいい。

それはともかく、わたしは借りるより買う方が落ち着くので、図書館で借りても、これは手元に置いておきたいと思ったら、たいてい自分でも買ってしまふ。だから、大学、大学院時代を通し、正直それほど図書館を利用した記憶がない。基本的な本は各専攻の研究室にそろっていたということもある。それより、よく使う本は大学院のころから自分で買っていたようだ。だから、愛大に赴任したときも、段ボールでかなりの数の本を家と研究室に運びこんだ記憶がある。

■ 図書館をありがたいと思ったとき

そんなわたしが図書館を利用するのは、専門外の本を利用したいときである。1980年代に、日中の共通の漢語の起源を追いかけたとき、愛大図書館はとても役にたった。調べたのは17世紀以降にできた「熱帯」「回帰線」

「海流」「貿易風」「半島」といったことばで、古い辞書はもちろん、いろんな分野の資料にあたる必要があった。その多くを愛大図書館はもっていたし、自分で買えない高価な本は図書館で買ってもらった。(そんなときは学部の図書費が運良くあまったりした) その中心はいわゆる中国の洋学(西学)書で、ロバート・モリソンの『中国語辞典』をはじめ、多くの本をこの時期集中的に買ってもらった。(その後も同僚の塩山さんとともに買い続けている) このときほど愛大図書館のありがたみを感じたことはなかった。もちろん、愛大だけでは足りないで、自分でもたくさん買ったし、国会図書館、内閣文庫、天理図書館、東北大学図書館等々の国内の図書館をはじめ、イギリスの大英図書館にも4年通い、1997年に『近代日中学術用語の形成と伝播』(白帝社)という本にまとめた。(これでのちに学位をもらった) その際、自分で買ったものの中で一番高かったのはロプシャイトの『英華字典』である。これなどは離婚でもしないと買えないと思ったほどだが、不思議なもので、NHKラジオの仕事が入って、そのお金で買うことができた。先にオークションでも開きたいと書いたのはこの頃集めた本である。

中国の図書館は当時利用が面倒だったので、ほとんど利用せず、中国の古書店で19世紀から20世紀にかけて出た英華・華英字典の類、地理・科学書を広く買い求めた。最近はいい本が出ないので、あまり回らなくなったが、わたしが北京や上海へ行く主な目的は古書店巡りである。友人の関西大学の内田慶市さんなどは、上海に留学した一年の毎日を古書店巡りについやしたそうだ。これによって上海のめぼしい古書はほぼ枯渇したとさえ言える。(実際ほとんどない)

中国もそうだが、国内の図書館でも、何回か通えばそれなりにお金がかかる。それで、何回か通えば買えるほどの金額のものは、古書店にモノが出れば買い求めた。本とは不思議なもので、「求める人のもとにやってくる」のである。最近はこの方面の情熱が衰えたのか、古書市場が枯渇したのか、自分にとってめぼ

しい本がほとんど出なくなった。こうしたことも「ためこむ」習性のなせるわざで、これは死ぬまでつづくだろう。

■ 本をさがす

その内田さんは中国語の世界では有名なパソコンの達人である。そのかれがアメリカ、ボストンのハーバード大学に研究留学で出かけたときに書いた本に『ハーバード電腦日記』(同学社)がある。この中で内田さんは、パソコンを使って、自分の必要な資料を探し求めると同時に、毎日のようにハーバード大の燕京図書館の書庫に入り、書架をなめるようにして見てまわったという。今、わたしたちは図書やデータの検索ではずいぶん便利になっている。しかし、大事なことは目的とする本をピンポイントで追い求めるだけでなく、その周囲を眺め回すことである。そこに思いがけない、別の面白い資料、本が待っているかもしれないからだ。(同じことは紙辞書にも言える。電子辞書だけでは、辞書を使ったことにならない。)



NHKテレビ「体あたり中国語」のメンバーと

■ 図書館のあり方

(1) 貴重書の公刊

その内田さんは、現在自分の本を含め、関西大学の西学東漸に関する辞書、書籍をつぎからつぎへとマイクロフィルムに撮って公開しようとしている。資料は広く公開すべきだというのである。わたしも、かれの必要とする貴重な本を譲ったり、わたしの欲しい資料と交換したりしたことがある。ただ、それはお互いに、他人が苦勞して手に入れた書物に対

する敬意があつての話である。そうでなく、自分が苦勞もしないで、人の持っている資料を公にするのは当然のごとく要求する人が時にいるが、それはどうかと思う。いや、自分が苦勞して資料を集めている人ほど、人の資料を借りるのは畏れ多いものである。

もちろん、国会図書館のように国民の税金でまかなわれている図書館、研究機関については、予算の許せる限りそうしてもらいたい。しかし、個人や私学の資料について同じように言えるかどうかは問題だ（私学も国庫助成は受けているから、その図書館もまったく私的なものとは言えないが）。天理大学や早稲田大学のように、早くから貴重書の公刊をしているところもある。そして、わたしたちはそうした本を多少の金銭的犠牲を払えば利用できるようになってきている。愛大にも、他の大学にない貴重な図書、資料がたくさんある。その一部はすでに公刊しているし、その他の資料もやがて公刊して、一般の研究者の利用に供するときがくるだろう。これは時代

の趨勢でもある。大事なことは、あえて貴重書を公刊に踏み切った大学、大学図書館に対する敬意を常に失わないことである。

(2) 図書館をどう変えていくか

最近の図書館は、本を読んだり調べたりするだけでなく、語らいの場、集う場であることを求められているようだ。大学の中で、学生が集える場所が少ないことはたしかだ。しかし、静かに本を読んだり、調べものをしているときに、横でおしゃべりをされてはたまらない。これは分煙のようにすべきである。

今の愛大豊橋図書館の1階を見ていると、平机に集って話をしている学生もいるので、その並べ方にも問題があるようだ。可能であれば、同じ1階の壁際の席のように一人一人の席を区切るとよい。試験のシーズンには30分以上離れると荷物を撤去するなどの条件をつけて、指定席にするのもよい。また、図書館での飲食についても、一部コーナーを設けるなどの検討も今後必要となろう。